

増上寺旧本堂に関する研究

～慶長本堂と寛永本堂～

Keywords

甲良宗広 江戸幕府作事方
匠家雛形 建仁寺派家伝書



AK12046 齊藤 和寛

1. はじめに

増上寺は東京都港区芝公園四丁目にある浄土宗の寺院である。明治時代はじめまで徳川家の菩提寺として、関東最大級の寺院として大造営されてきた。明治維新以降境内一円が芝公園となり、1945年の東京大空襲で大半の伽藍が焼失してしまった。中でも、寛永11年（1634）に建立された寛永本堂は関東最大級で壮大であった。しかし明治7年（1874）に放火によって焼失してしまう。その後も二度再建されるが焼失してしまう。

東京は今日、大開発により、江戸の面影を残すものが少なくなってしまう。寺院はこうした江戸時代の記憶を今後伝えていくために、守っていく必要があると考える。

1.1 研究背景と目的

明治維新以降の境内縮小により、現在残る主な伽藍は、本堂・経蔵・三門・方丈・安国殿・鐘楼等のみにってしまった。中でも当時の姿を残しているものは三解脱門と経蔵のみである。慶長3年（1598）貝塚（現在の皇居内旧本丸の地）にあった増上寺が、現在の芝に移転してから同16年（1611）に初代の本堂が完成する。その後寛永11年（1634）に再建された本堂は明治7年（1874）に放火により焼失するまで240年間の間、増上寺の大造営時代を支えてきた。徳川家の手厚い援助を受けて、絢爛豪華であったと伝えられている。当時幕府の作事方大棟梁であった甲良家初代宗広は日光東照宮や増上寺徳川霊廟など、多くの幕府建築を担当していた。同じく幕府の作事方大棟梁であった平内家は和様の建築様式であるのに対し、甲良家は禅宗様を用いたとされる。

本研究では初代と二代、二つの本堂に焦点を当て復元・比較し、時代背景を踏まえた上で建て替えの意図を探る。

1.2 研究方法

研究方法は以下の通りとする。

- 1) 増上寺に関する史資料、絵図を収集する。

2) 匠家雛形、増上寺古図、江戸名所図会等を参考に本堂の図面をCADで作成し設計手法を考察する。

3) 幕府作事方等の時代背景を調査し、本堂造営の意図を探る。



図1 増上寺所在地

2. 増上寺旧境内

増上寺は明徳4年（1393）、浄土宗八祖西譽上人により貝塚台に創建された。徳川家康が菩提寺と定め慶長3年（1598）江戸城拡張の際、芝へ移転した。同16年（1611）に、三解脱門・本堂・方丈・鐘楼等の伽藍が揃って以降、徳川家の保護を受け、徳川家霊廟だけでなく、子院・学寮が拡張していき3000もの人口を有しており小さな都市のようであった。この旧境内は享保5年（1720）に御霊屋建立が禁止されるまでに東西南北に敷地を広げ拡大していく。以降は徐々に安定した。

しかし明治元年（1868）の神仏分離により、30ヶ所以上あった鎮守社や弁天の小堂などが独立、あるいは破却売却された。同4年（1871）には社寺領土地の太政官令が布告され祭事法要に必需である部分以外は全て上地されてしまう。そして明治7年（1874）の放火による火災により本堂は焼失。ほんの数年のうちに資産の大半を失ってしまう。そして同42年（1909）には新本堂が浮浪者

の煮炊きの火が燃え移ったことによって再び焼失し増上寺は力を落としていく。

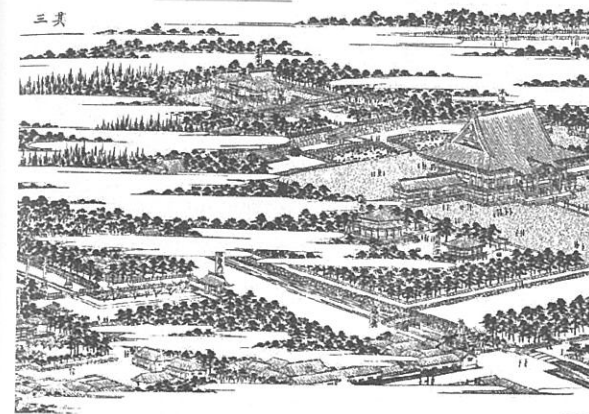


図2 江戸名所図会 三縁山増上寺

3. 初代慶長本堂と甲良図面

初代慶長本堂は、慶長3年（1598）に増上寺が貝塚から芝の地に移転し、最初に建てられた本堂のことを指す。入母屋造、柱間で間口九間奥行七間と、大規模なものであった。建築様式は禅宗様が強く、全体を四方の入側で囲む平面となっている。

3.1 甲良家と匠家雛形

甲良氏は江戸幕府の作事奉行輩下である幕府大棟梁を務めた家系である。建仁寺流として11代まで続いた。主に日光東照宮造営修理、江戸城の修復なども行った。

『匠家雛形』は安政4年（1857）に、11代甲良棟隆のあと流派を引き継いだ大島盈株によって記された甲良家伝来の木割書で、大間が実寸で表記され、その長さを20枝とする。慶長本堂は「芝増上寺元本堂」として個別で記載があり、より詳細で信憑性のある数値を取ることができる。大間が一丈九尺五寸であるから、1枝が九寸七分五厘（295mm）と求めることができる。本研究ではこの数値をもとに各部材の寸法を割り出していく。主に組物等の各部材寸法は、同じ甲良家の木割書である『建仁寺派家伝書「諸堂」』を参考に、甲良家の設計に当てはめ、図面を作成する。図3は匠家雛形における増上寺寛永本堂についての記載である。

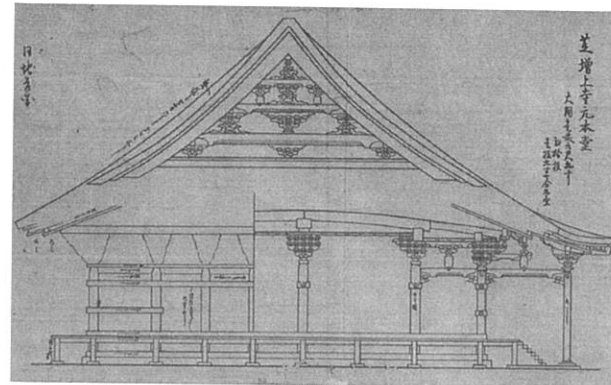


図3 匠家雛形 慶長本堂立面断面図

そして、同地指図として、平面についての表記がある。間口三間、奥行三間の内陣に阿弥陀如来を安置し、左右脇陣と手前奥行き二間の外陣を付し、全体を四方の入側で囲む平面であることが見て取れる。またその指図の下には、「柱 大間ニテ壱寸一分取」「内之柱廻り側柱ニ式分増」とあることから柱寸法等を得ることができる。

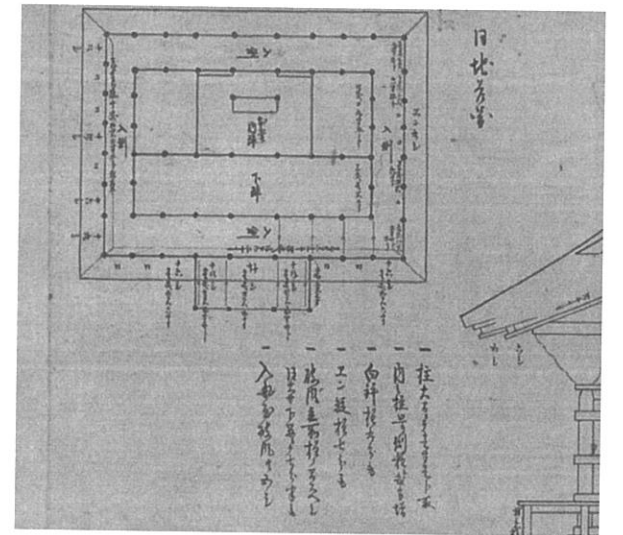


図4 匠家雛形 平面指図

3.2 二つの図面の相違

図3と図4に挙げた図面は、東京都立中央図書館木子文庫所蔵の重要文化財である『匠家雛形』の一部である。そして図5は、伊坂道子著『芝増上寺境内地の歴史的景観』の中で、芝増上寺本堂図として記されている。一見同じ図面であるようだが、数カ所相違がみられる。図5の左下部分には、「寛永十一年 棟梁 甲良豊後守 鶴形部右衛門」と印が押してある。他にも幾つか文字の配置がずれていることから、二つは別の図面であることがわかる。木子文庫の『匠家雛形』の末尾の部分には、「安政四丁巳年 三月 建仁寺流 大島盈株 蔵」と記されている。大島盈株とは甲良家12代で10代目甲良棟全の子である。このことから、図3・4の図面は、初代宗広によって作成されたものを、12代大島盈株によって模写したものであると考えられる。

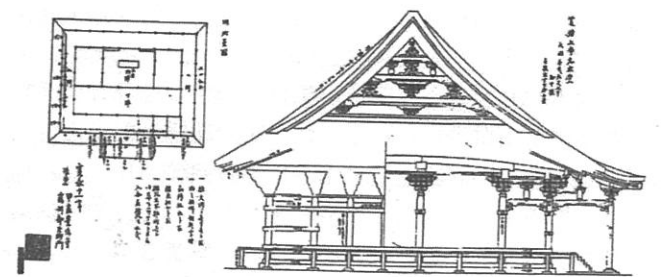


図5 伊坂道子著『芝増上寺境内地の歴史的景観』の中で記された初代本堂の図面

3.3 初代慶長本堂の平面図立面図

図6、図7は、絵図・匠家雛形を参考にCADで作成した図面である。

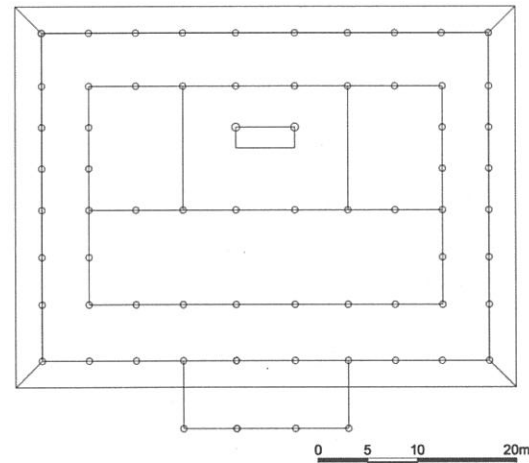


図6 初代慶長本堂の平面図

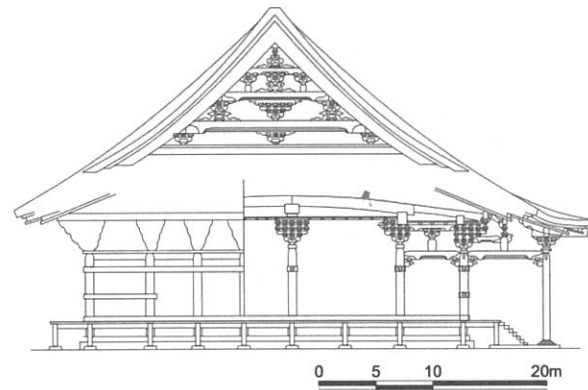


図7 初代慶長本堂の立断面図

4. 二代本堂と江戸幕府作事方

二代目寛永本堂は寛永11年（1634）に初代本堂からわずか20数年足らずで建て替えられた。慶長本堂と変わらず入母屋造、柱間で間口九間奥行七間であったが、唐破風が付き建築様式も禅宗様から和様が強い造りとなった。建立以降明治7年に放火によって焼失するまで240年に渡り増上寺の本堂として存在していた。

4.1 岩城家による実測図面

11月16日の調査で、増上寺の所蔵庫に、寛永本堂の図面があることがわかった。「三縁山増上寺御本堂正面側面百分毫之図」写真1、2は文政5年（1822）に実測により作成された図面を、明治34年（1901）に模写した図面である。富山県滑川市を中心に全国で活躍した堂宮大工である岩城家の岩城庄造によって実景図面が作成され孫長男である庄之丈によって模写されたものである。横浜美術館所蔵「ザ・ファー・イースト」写真3に掲載された寛永本堂の写真や、江戸名所図会図2に描かれたものと比較しても、同一のものであることがわかる。本研究ではこれらの史料をもとに寛永本堂の設計手法を探る。

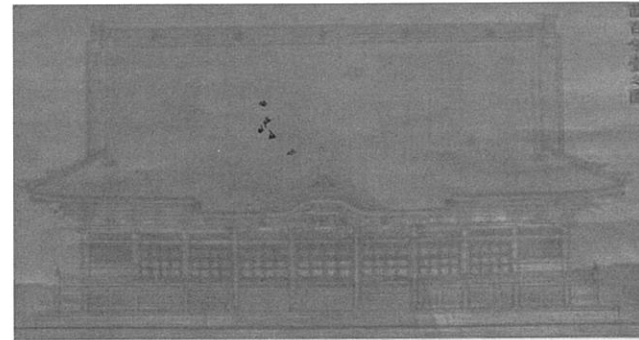


写真1 岩城家による実測図面正面図

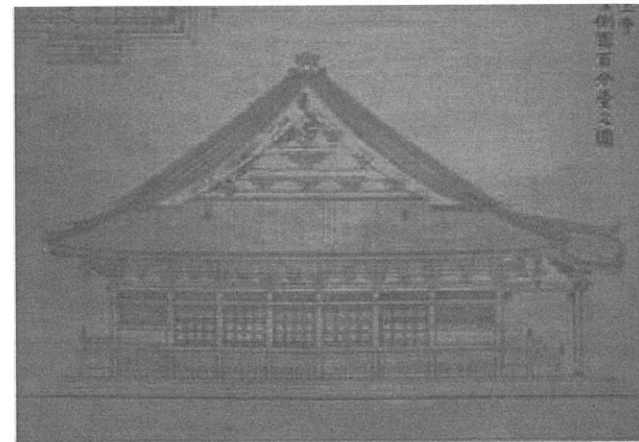


写真2 岩城家による実測図側面図

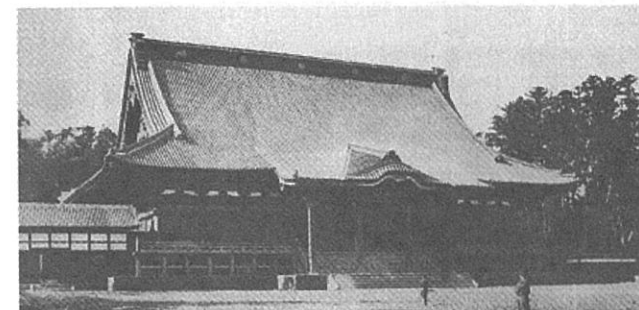


写真3 横浜美術館所蔵「ザ・ファー・イースト」より

4.2 初代慶長本堂の平面図立面図

図8、9は岩城による実測図面や絵図写真を参考に作成した二代寛永本堂の図面である。

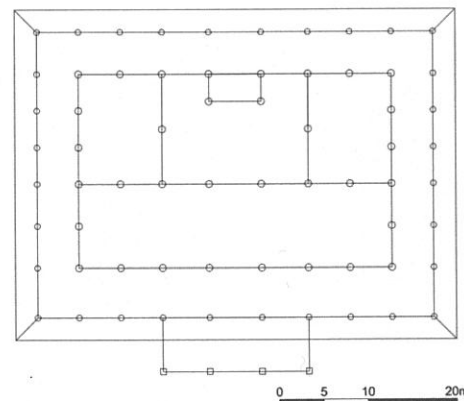


図8 二代寛永本堂の平面図

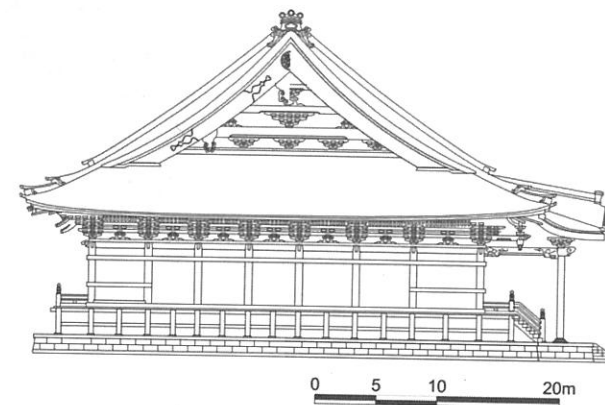


図9 二代寛永本堂の立面図

5. 両本堂の比較

わずか二十数年で建て替えられた本堂はほぼ同じ規模で、非常に似たものとなっていたことがわかる。ここで二つの本堂の比較を行う。慶長本堂は禅宗様であるのに対し寛永本堂は和様の造りである。木割を比較すると、垂木の真々寸法で設計の基準寸法となる一枝あたりの数値は9寸7分5厘と9寸7分と非常に近い数値となっている。地垂木と飛椽垂木の長さを示す数値は両本堂同じ数値である。柱の配置は内陣の両脇の二本以外は同じで、須弥壇の位置はわずかに違う。屋根勾配は慶長本堂の方がやや大きく高さがある。

6. 作事方大棟梁の変遷と時代背景

6.1 江戸幕府作事方

江戸幕府に於いて、成立当初は作事方の設置は無く、幕府の営繕事業は土木造営として普請奉行によって城郭や城下の整備に重点が置かれていた。寛永年間に入りようやく大土木事業がひと段落し建設の主体が土木から建築に移行していった。寛永9年に新たに作事奉行を常設し造営を行う際の運営組織が確立する。作事方設置の4ヶ月前に完成した二代將軍の霊廟である台徳院霊廟の造営担当者名の中の下棟梁5名の中には平内や甲良など後の幕府大棟梁となった家柄が見られる。幕府が当時最も力を注いだ霊廟作事に携わった棟梁らが後に世襲によって幕末まで多くの幕府建築を担当することとなる。

6.2 江戸城における改築と將軍

幕府の菩提寺であった増上寺の建て替えと、江戸城天守閣の改築を関連付けて考える。江戸城の天守閣は初代の家康、秀忠、家光と三代それぞれの時代に一度ずつ改築されている。慶長12年（1607）、元和9年（1623）、寛永15年（1638）の16年15年という短いスパンで建て替えられているのである。秀忠による建て替えは一回り大きく場所も北へ移し、改築というよりは新築になるものだったという。一方で家光による改築は、基本構造も

外見もさほど変わっておらず、同じ石垣を用いたとも言われている。同じ家光の時代に建て替えられた寛永本堂も礎石をそのまま用いた可能性がある。

慶長本堂と寛永本堂とで場所が変わっていないとすれば、礎石をそのまま用いた可能性がある。甲良家による慶長本堂の図面には土台が表現されておらず、絵図からは正確な本堂の配置を読み取ることはできない。しかし増上寺の伽藍配置は宗教的な意味を持っている。本堂から当時の中門に当たる三解脱門までの距離は48間であるが、これは阿弥陀仏が法蔵菩薩のときに立てた48の誓願である「仏の48願」からきているとされる。また、三解脱門から大門までの距離は108間で人間の煩惱の数と言われている。増上寺が芝に移転した当時の將軍家康は宗教を重んじる人物であったことから、その伽藍配置を守り同じ場所に本堂を建てた可能性が高いと言える。

7. 考察

慶長本堂と寛永本堂を比べると、非常に似ていて、わずかな年数で建て替えられたことに疑問が生まれる。しかし増上寺建て替えを命じた三代將軍家光は同じように江戸城天守をわずか15年で建て替えているという共通点がある。秀忠公の霊廟がある増上寺を菩提のために建て替えたとも考えられるが、規模が大きくなったわけでもなく意図としては不十分に感じる。また、家光と秀忠の関係は良くなかったとも言われていることから秀忠菩提のためだけに建て替えるとは考えにくい。しかし増上寺を末永く徳川家の宗廟とするために力を注いだと考えることができる。また寛永本堂の設計が誰によるものかははっきりしていないが、徳川家菩提寺である増上寺の本堂は霊廟建築と同じように、江戸幕府作事方によって当時の優秀な技術を用いて建立されたことは確かである。二つの本堂の最も大きな相違点である建築様式は造営に関わった棟梁が関係していると考えられる。

参考文献

- 1) 伊坂道子『芝増上寺境地の歴史的景観』岩田書院 2013年
- 2) 河田克博『日本建築古典業書 近世建築書 堂宮雛形』大龍堂書店 1988年
- 3) 伊坂道子『増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書』境内研究事務局 2003年
- 4) 増上寺HP <http://www.zojoji.or.jp/keidai/>
- 5) 市古夏生・鈴木健一『新訂 江戸名所図会』ちくま学芸文庫 1996年
- 6) 田邊泰「江戸幕府作事方職制に就て」1936年 建築雑誌第50号 第50号
- 7) 石山昭憲『縁山へのてびき』協栄社 2003年